

平成30年6月5日現在

機関番号：30107

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K03281

研究課題名(和文)「ベルギー合意型連邦制の脆弱性と強靱性」についての研究

研究課題名(英文) Research about Vulnerability and Resilience of the Belgian consensus federation

研究代表者

松尾 秀哉 (Matsuo, Hideya)

北海学園大学・法学部・教授

研究者番号：50453452

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 800,000円

研究成果の概要(和文)：ベルギーは、連立政権が形成できない「分裂危機」を繰り返してきた。なぜこれほどまで「危機」が繰り返されるのか。

検討の結果、連邦制導入を経て政党が地域主義化する傾向がみられた。それによって、中央での合意形成は困難となった。しかし、一定の没交渉期間を経ると既成政党は「合意」へ転換した。「異質なアクター」が参入した場合の「脆弱性」は認められるが、必ずしも連邦制の導入そのものに根本的原因があるとは言えず、経済格差などの構造的要因を背景にして、政権交代などで政党間競争が高まると連邦制は地域主義政党を台頭させやすい性質を有していることが明らかになった。

研究成果の概要(英文)：Belgium has repeated "political crisis" that the coalition government could not form from 2007. Why is the crisis repeated so far?

As a result of this research, there was a tendency for political parties to become regionalize by the introduction of federal system. It made it difficult to form consensus in the federal government coalition process. However, after a certain period of negotiation, the established parties converted to agree. Although "vulnerability" is visible when "heterogeneous actors" entered in the coalition-making processes, the introduction of the federal system itself can not necessarily have a cause of crisis, and due to the structural factors such as economic disparity, or the increase of party competition by the change of government, the federal system has a property that makes it easier to raise regionalist parties.

研究分野：政治学

キーワード：ベルギー 連邦制 分裂危機 分離主義 ポピュリスト

### 1. 研究開始当初の背景

ベルギーは、2007年の選挙以降半年、さらに2010年の選挙後1年半の間、フランデレン民族とワロン民族の間の対立によって、連立政権が形成できない「分裂危機」を繰り返してきた。さらに2014年5月(申請時)に行われた選挙後、やはり合意形成は困難で、9月末現在で約120日の政治空白が生じていた。結局翌月初旬に合意形成に至ったが、それにしても、なぜこれほどまで「危機」が繰り返されるのか。

先行研究は、主にベルギーの連邦制が合意形成を阻害し、かつ政治アクターも地域主義を強めているとしてきた。その点は、申請者もその時点で同じ考えを持っていた。

しかし、ベルギーは政治空白を続けながらもなお存続している。これほどまで危機を繰り返しながら、なぜ分裂に至らないのだろうか。つまり、従来の研究は、「なぜベルギーが分裂に至らず、維持されているか」という問いにも答えられていなかったのである。

### 2. 研究の目的

過去、申請者は2010年の1年半を要した連立交渉について、ベルギー型連邦制が「交渉者の数を増加させて合意形成を困難にする可能性」(脆弱性)と、逆に、2)「選挙の数を増やし、次の選挙が近づくと「合意」に向けた圧力を高める可能性」(強靱性)を有していることを明らかにしたが、申請者の以上の分析は2010年に限ったものであり、「ベルギー型連邦制」についての特徴とは言えない。そこで本研究は、連邦制導入後の4つの交渉(1995、1999、2003、2007年)について、同様の交渉過程分析を行い、一般化を試みた(ただし、2007年については業績12、18で、ほぼ分析は終了しているため、焦点は1995、1999、2003年である)。連邦制導入後、ベルギーが長期の政治空白(分裂危機)を繰り返す理由と、それが「危機」でとどまり本当に「分裂」することはない理由とを明らかにすることを目的としている。

### 3. 研究の方法

ちょうど申請書執筆時に進行中だった2014年を中心に、過去の交渉過程を遡って検討し、通時比較して、ベルギーが1993年に導入した連邦制が、多民族国家の政治的安定/不安定の変化に及ぼす影響の一般化を試みようとした。

より具体的には、従来申請者が事例分析に用いてきた分析枠組み(図1参照)をベースにし、1)枠組みの理論的検討を行ったうえで、2)現地資料調査(連立交渉にあたったリーダーの回想録、インタビュー記事)を行い、3)成果公表を進めた。

また、申請者は従来、他の研究者同様に、フランデレンの地域主義者分析に注力し、ワロン側の「抵抗」行動を軽視してきた反省があり、今回の研究ではワロン側の動向にも注

目した。

さらに2008年のユーロ危機以降、欧州全般が動揺していたため、その影響を外的要因として抽出することを考えた。具体的には、2010年以降、欧州委員会や欧州理事会の決定がベルギー政治に及ぼす影響に注目した。これらの外生的、内生的変数を考慮しつつ、ベルギーの連邦制の政治的意義を総括した。

### 4. 研究成果

2010年までの動向を見る限り、第一に、連邦制導入と、それに伴う選挙区改革を経て、「競り上げ効果」によって政党を地域主義化する傾向がみられる。それによって、地域主義政党の台頭を許した。

第二に、その結果として地域主義政党の交渉参入(=異質な交渉アクターの増加)による交渉上の「対立」が顕著になり、「中央」での「妥協」と「合意」が困難になったことが明らかになった。以上は脆弱性と評価される。

第三に、しかし、一定の没交渉期間を経ると、次の地方統一選挙の目前に、既成政党(CDVやPS)は次期選挙における「罰則」を恐れて「合意」へ意志を転換したことが明らかになった。これは連邦制度に付与された制度的特質と考えられ、「強靱性」と評価できる。

しかしながら今回の研究の最大の知見は、ベルギーに特殊な要因ではあるが、2014年の選挙で地域議会選挙と連邦議会選挙が同日に行われることになり、二つの次元で同時並行的に連立交渉が進められたため、地域政府の連立交渉の結果や経過が連邦(中央)の連立交渉の経過や結果に影響を及ぼすこと、もしくは逆に、中央の交渉が地方の交渉に影響することが見られたことである。これにより交渉はマルチレベルの複雑なゲームとなった。今後、この点をゲーム理論的に展開し、さらに海外ジャーナルへの掲載を目指していきたい。

最後に、ベルギーが「欧州の首都」ブリュッセルを抱えるがゆえに、EUの動向に大きく左右されることが見いだされた。欧州委員会人事の結果、ベルギー首相が変更されたり、欧州理事会議長に首相が選ばれると、ベルギーの首相を辞めたりする(ファン・ロンパイ)などの事例を挙げることができた。

すなわち、2007年以降、分離主義者という「異質なアクター」が連立交渉に参入した場合、交渉が長期化し、政治危機に陥るという点での連邦制の「脆弱性」は認められるが、一定の期間を経れば、合意形成に向かうという「強靱性」も認められる。むしろ連邦制導入によって選挙の数が増えて、対立していたアクターを、選挙直前に「合意」に向かわせる「強靱性」が目立ってくる可能性が高い。ただし、地方と中央の同日選挙は、交渉を複雑化し、予測不可能性を高めるというリスクがある。ベルギーの合意型連邦制は「脆弱性」

と「強靱性」を併せ持つといえる。

また、「脆弱性」が高まる構造的条件を検討した。それによれば、経済格差の高まりと政党間競合の高まりが重なると、「地域間格差」が争点となりやすい性質を多民族連邦制国家は有していると考えられた。これは他の分離主義が高まっているカタローニヤ、スコットランドにおいても言えると思われた。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計4件)

1. 松尾秀哉「吹き荒れるポピュリズムの行くえ」季刊・現代の理論デジタル13号、2017年、1ページ。  
<http://gendainoriron.jp/vol.13/feature/f06.php>

2. 松尾秀哉「欧州は新世代ポピュリストの大陸なのか」季刊・現代の理論デジタル12号、2017年、1ページ。  
<http://gendainoriron.jp/vol.12/feature/f04.php>

3. 松尾秀哉「ヨーロッパの華やかな小国・ベルギーがなぜ「テロの温床」になったのか」オンラインジャーナル『現代ビジネス』4号、2016年、1-5ページ。  
<http://gendai.ismedia.jp/articles/-/48352>

4. 松尾秀哉「ベルギーが「テロの温床」となるまで」中央公論、2016年6月号、148-154ページ。

[学会発表](計4件)

1. 松尾秀哉「多極共存型民主主義における大統領制化とその後」ベルギーの場合」日本政治学会、2017-9-23、法政大学。

2. 松尾秀哉「合意型デモクラシーにおける君主」日本政治学会、2016-10-01、立命館大学。

3. 松尾秀哉「衝突と和解のはざままで」シンポジウム「司法の市民参加と多文化主義」2015-12-05、北海道大学。

4. 松尾秀哉「2014年のベルギー連立交渉：分裂危機の終焉か、新しいカオスの始まりか」日本政治学会、2015-10-10、千葉大学。

[図書](計8件)

1. 松尾秀哉(仮)「君主を戴く共和国ベルギー-国王とデモクラシーの紆余曲折」水島治郎・君塚直隆編(仮)『現代世界の陛下たち』2018年予定、ミネルヴァ、ページ未定。

2. 松尾秀哉「ベルギー政治における国王」津田由美子・松尾秀哉・正躰朝香・日野愛郎編『現代ベルギー政治』、ミネルヴァ、2018年、33-47ページ。

3. 松尾秀哉「合意型民主主義におけるポピュリズム政党の成功」中谷義和他編『ポピュリズムのグローバル化を問う』、法律文化社、2016年、102-118ページ。

4. 松尾秀哉「ベルギーにおける多極共存型連邦制の効果」松尾秀哉、近藤康史、溝口修平、柳原克之編『連邦制の逆説?』ナカニシヤ出版、91-107ページ。

5. 松尾秀哉『連邦国家ベルギー』吉田書店、2015年、1-212ページ。

6. 松尾秀哉「ファン・ロンパイの合意型リーダーシップとその変容」臼井陽一郎編『EUの規範政治』、ナカニシヤ出版、2015年、99-115ページ。

7. 松尾秀哉「欧州危機下におけるベルギーの分権改革」山田徹編『経済危機下の分権改革』公人社、2015年、147-168ページ。

8. 松尾秀哉「ベルギー分裂危機への道」フランデレン・キリスト教民主主義政党の党改革」吉田徹編『野党とは何か』ミネルヴァ、2015年、171-202ページ。

[産業財産権]

出願状況(計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

[その他]  
ホームページ等  
なし

6. 研究組織

(1)研究代表者  
松尾 秀哉 (MATSUO,Hideya)  
北海学園大学・法学部・教授  
研究者番号：50453452

(2)研究分担者  
なし ( )

研究者番号：

(3)連携研究者  
なし ( )

研究者番号：

(4)研究協力者  
なし ( )

図 1

